

## create creation : sapporo international art factory

「つくる」をつくる、札幌のもうひとつの地平



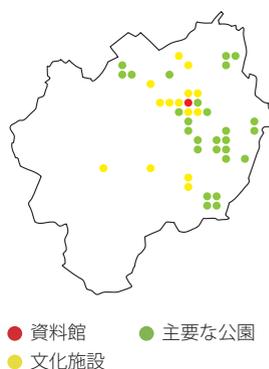
工場の増築によって資料館を札幌の創造活動の中心とし、その制作風景を公開することで市民が創造活動に参加するきっかけをつくります。私たちは市民とアーティストによる札幌の新しい文化を提案します。資料館と庭園のつくる歴史ある環境を壊すことのないよう、工場は高さを可能な限り抑えながら、木々を避けて建っています。半地下の工場からは青々と繁る木々が臨め、地面がむき出しになったようなその壁は、土の中にいるような感覚を工場にあたえます。この工場は都市の中心に建っているにもかかわらず、札幌の歴史が作ってきた素晴らしい自然に包まれているのです。

ここを訪れる人は、庭や空中広場から工場での「創造活動」をのぞきこみ、体験することができます。彫られかけの石塊、下書きのキャンバス、剥き出しの鉄、リハーサル風景、普段人が目にする事のない作品の裏側は、訪れる人を刺激し、実際にワークショップや制作活動を始め人もいます。そうして創られた作品はやがて札幌全体に散らばり、市民が創造活動に触れる機運をさらに高めます。僅か6基の雪像から始まったさっぽろ雪まつりのように、この資料館を中心に広がる「創造活動」の創造も、札幌における新たな文化になると思っています。

### 札幌の創造活動の中心

札幌には既に数多くの美術館や、作品展示に適した公園が存在し、敷地は市内でも特に文化施設が密集しているところに位置します。

そこで私たちは、資料館を単なる展示の場とするのではなく創造活動の中心とすることで、札幌の芸術文化をつなぐ場とすることを提案します。



### 知る、学ぶ、創る

創造活動を通して札幌の芸術文化をつなぐために、3つの機能を設定しました。

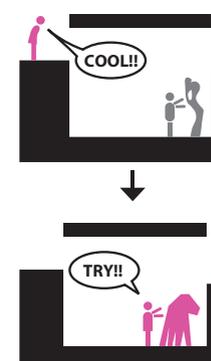
芸術祭などの情報や作品による展示による芸術の「発信」、アーティストや市民が学芸員とともに「研究」、そしてアトリエやワークショップなど、札幌に広がる作品を生む「工房」です。



### 「見る」から「創る」へ

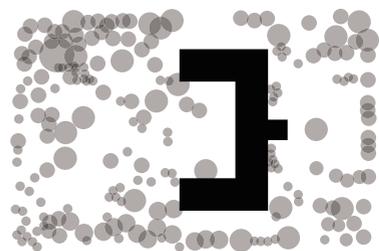
従来の美術館では既にできた作品を鑑賞するだけでした。この工房では、ただ作品を展示するのではなく、その制作過程を展示します。

工房は市民にも開放されているので、制作風景を見ることで創ることに興味を持った人はその場ですぐワークショップなどに参加できます。

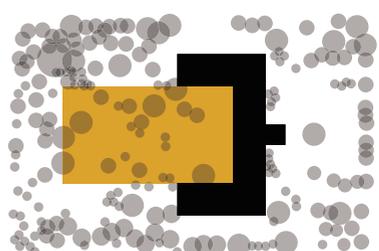


配置図 1:5000

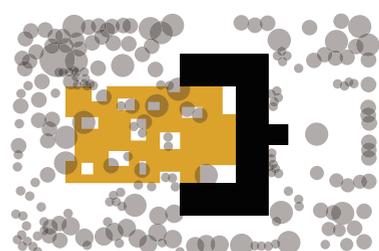
### 大通公園、木々、工房



敷地は大通公園の西端に位置します。公園の中でも木々の密度が高い場所です。

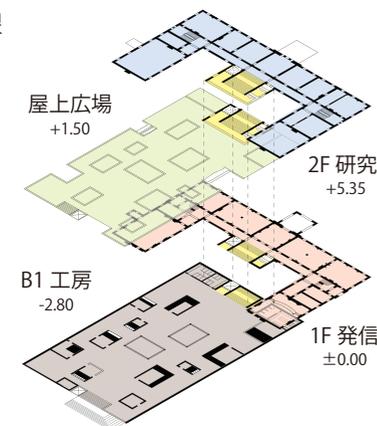


工房は大通公園をなぞるように、資料館の庭園に配置されています。



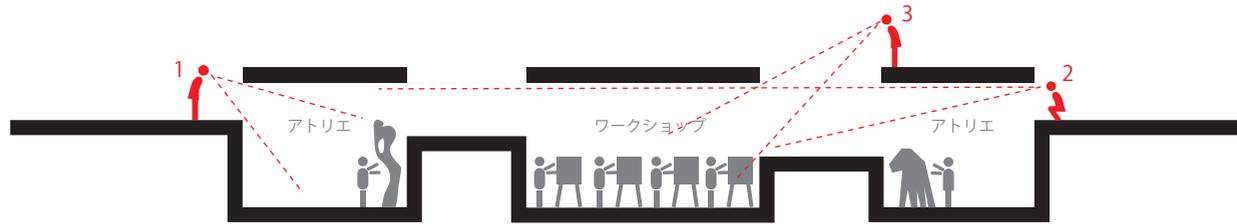
木々を避けて中庭を配置する事で大小の空間が生まれ、ゆるくつながります。

### 機能と動線



## 見せるための工房

工房が半地下になっている理由は、周辺環境への配慮だけではなく、工房の目的は作品制作だけではなく、その制作風景自体の展示にあります。地下に掘り下げ、窓を目線より低くすることで、工房内部を外から様々な視点で見ることができるのです。



### 1. 視線の高さ：1500 mm

立っている状態では周辺のアトリエスペースだけが見え、奥の空間に気を取られずに制作風景を俯瞰できます。



### 2. 視線の高さ：1000 mm

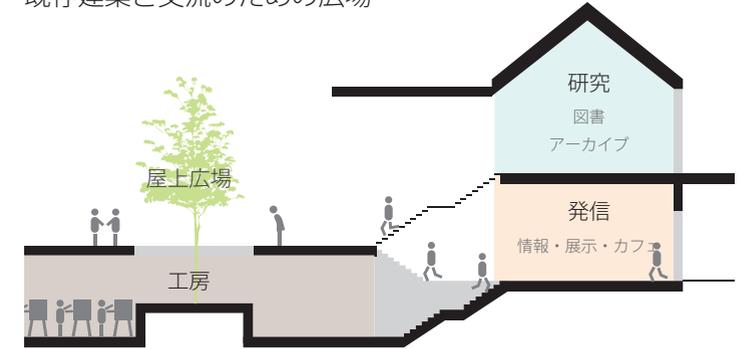
視線を低くすると奥まで見渡すことができるので、工房全体で何が起きているのか把握できます。



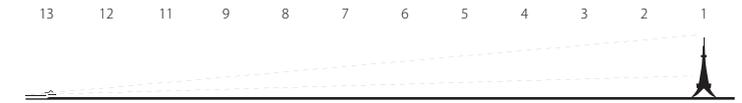
### 3. 庭から工房内部を臨む

屋上広場からは、制作スペースだけではなく、中央のワークショップスペースを間近で観察することができます。

## 既存建築と交流のための広場

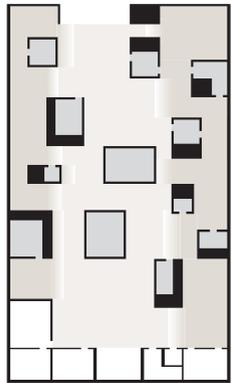


既存建築には、1Fに芸術祭などの情報発信・作品展示の場やカフェなど人が集まり芸術を発信する場、2Fに学芸員室や、市民が美術を気軽に学べる図書室を設けました。ファサードは保存した上で西側のみ窓を大きくとり、大階段によって工房や屋上広場に密接につながるようにしました。工房と視覚的に、既存建築と大階段によってつながっているので、屋上広場は資料館を訪れる全ての人が集う、資料館の交流の中心となります。



屋上広場からは西側の大きな窓を通して、大通公園の反対側に位置するさっぽろテレビ塔を遠く臨むことができます。





アトリエスペース  
ワークショップ

### 自由度の高い、ゆるくつながる空間

工房は中庭によって大小の空間に分かれ、ゆるくつながっています。エントランスから見通しの効く大きな空間は、ワークショップやコンサートができるみんなでつかえる空間に、周りを取り巻く小さな空間はアーティストが制作活動を行う場と想定しています。もちろん、すべての空間をアトリエとすることも、ワークショップのための空間とすることも可能です。

また、工房は空間が緩くつながっているので様々なイベントにもフレキシブルに対応できます。

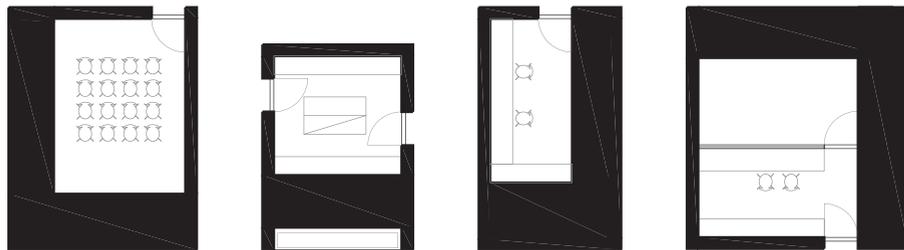
例えば、芸術祭開催期間中はメイン会場となり、工房で制作した作品をそのまま展示することもあるでしょうし、アトリエスペースをキッチンとすれば、「調理過程を見せる」レストランにもなります。

### 工房を補完する、中庭の下の部屋

木々の位置によって切り取られた制作スペースの残余としての空間は、木の根に配慮しながら、可能な限りスペースを取ります。

この諸室の一部は、録音作業や写真現像などの騒音や自然光を嫌う制作活動に対応します。また、アーティストの使う倉庫や洗い場、トイレなどの機能もここに収められています。

### 諸室の機能例

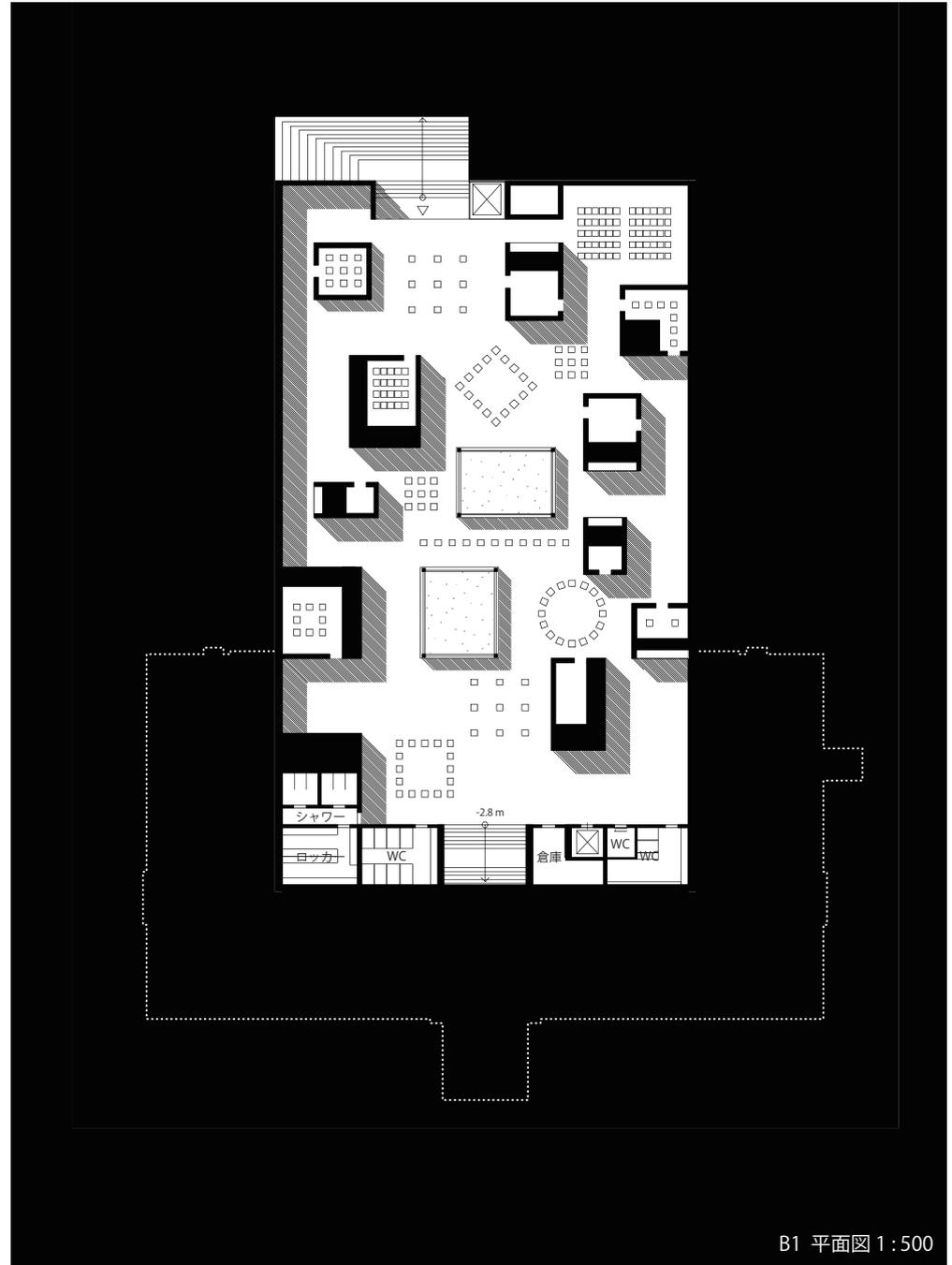


視聴室

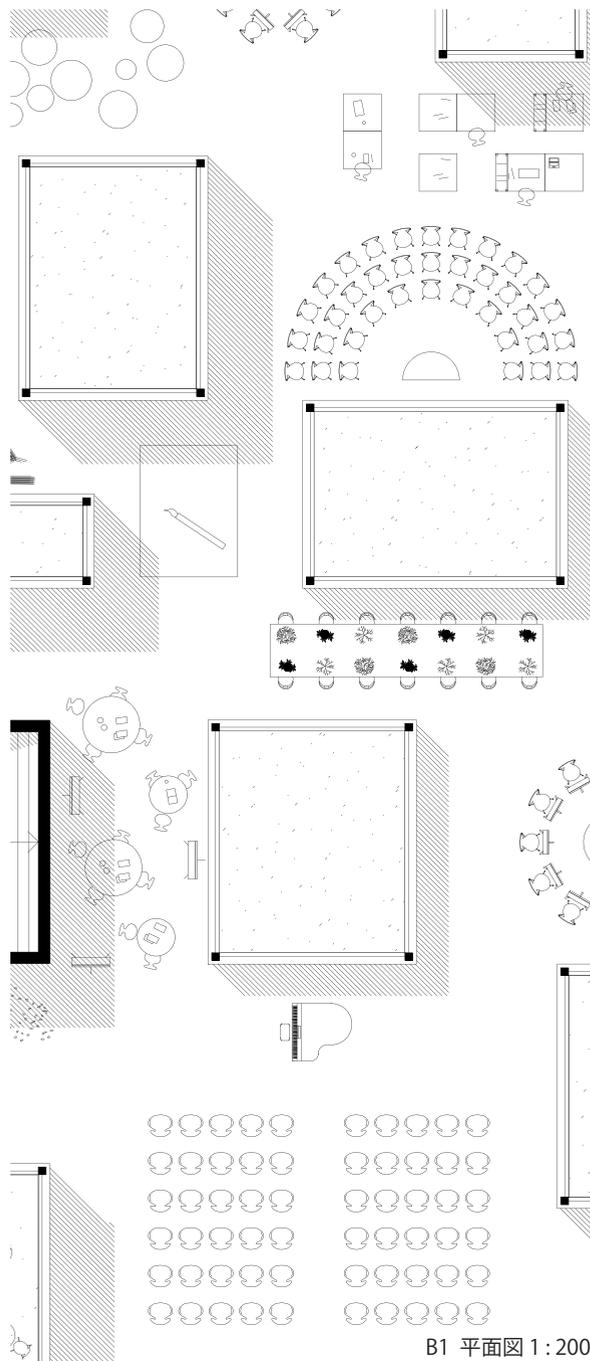
倉庫・洗い場

現像室

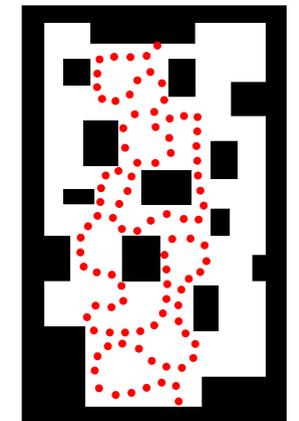
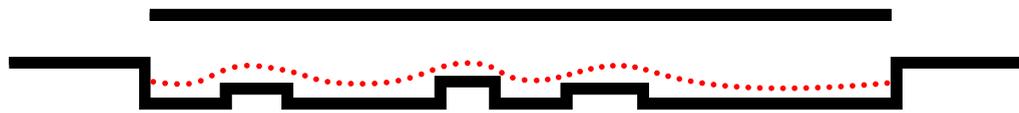
録音室



B1 平面図 1 : 500



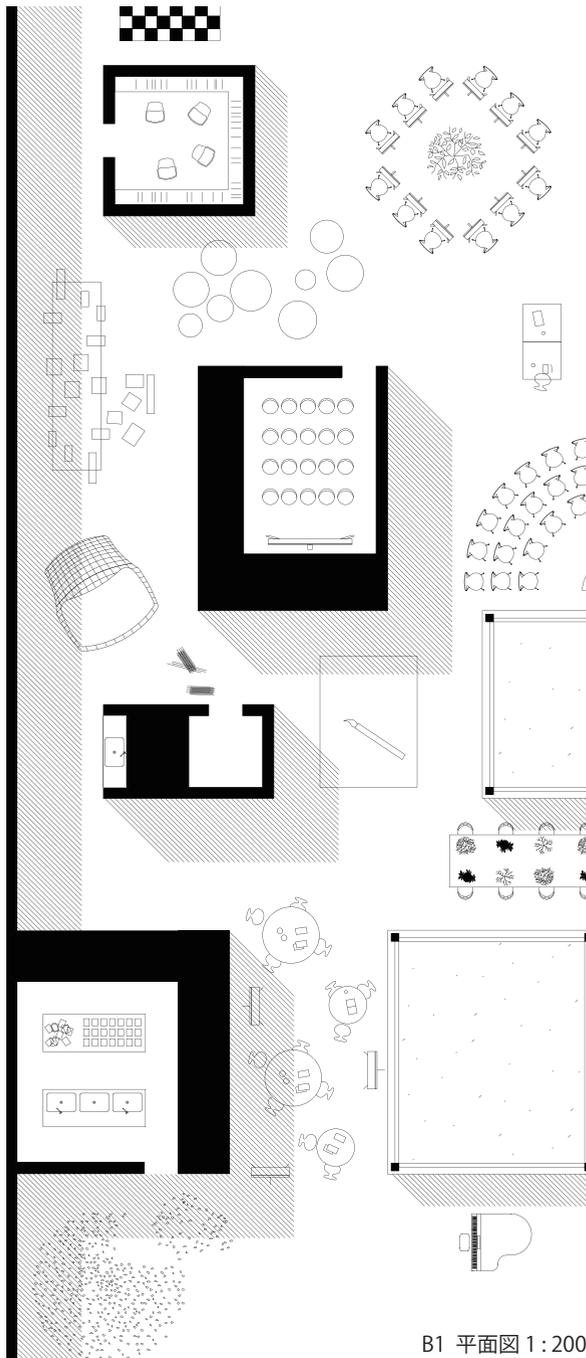
B1 平面図 1:200



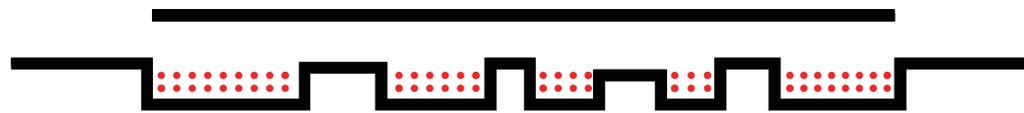
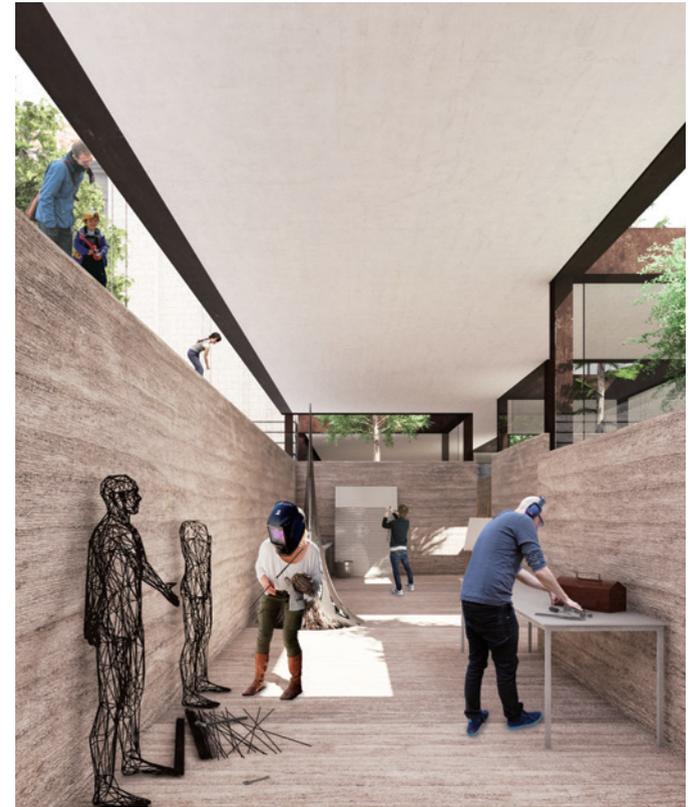
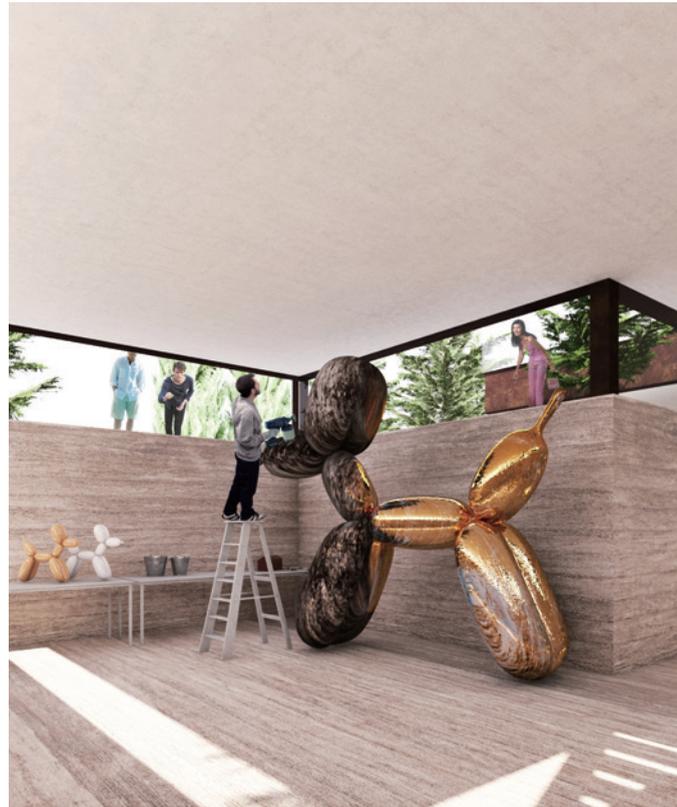
### 大きく使えるワークショップスペース

工房の中心に位置するワークショップスペースは、全体の見通しがきくように壁を低くしています。空間は緩やかに分節され、各々の空間で全く違うイベントをすることもできます。

ワークショップスペースからは様々なイベントや中庭の木々が一度に視界に入り、多くの人が使うこの場に賑わいをもたらします。もちろんアトリエともつながっているので、ワークショップをしながらアーティストによる質の高い制作風景も見ることができます。



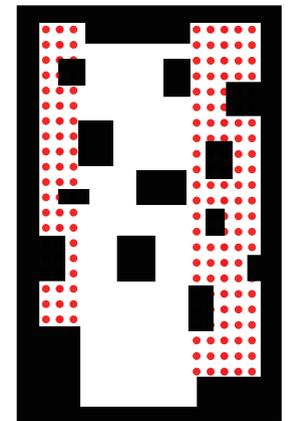
B1 平面図 1:200

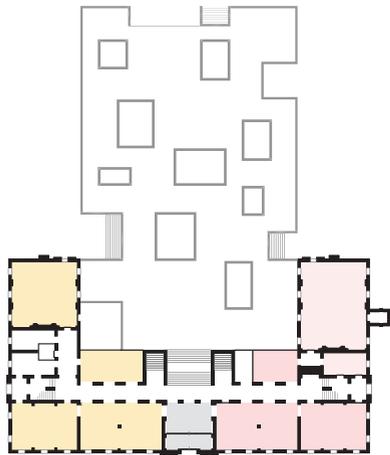


### 個性性の高いアトリエスペース

工房は比較的高い壁で囲まれているので、ワークショップスペースに比べて個性が高く、アーティストにとって集中して作業しやすい空間になっています。

また、工房の周部にアトリエスペースを配置することによって、外部からアーティストの作業風景が見下ろせるようになっています。

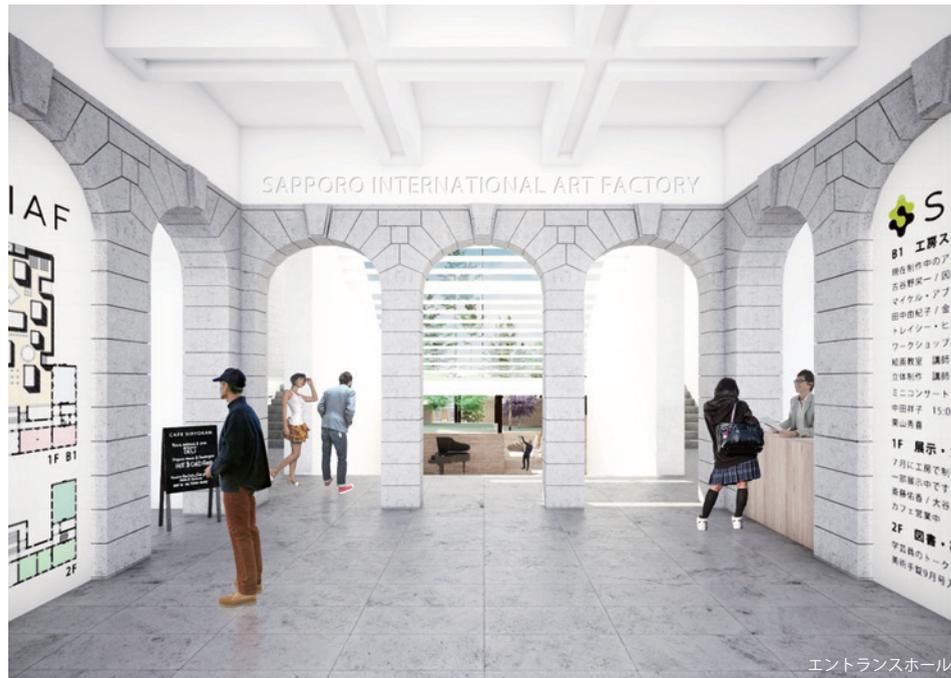




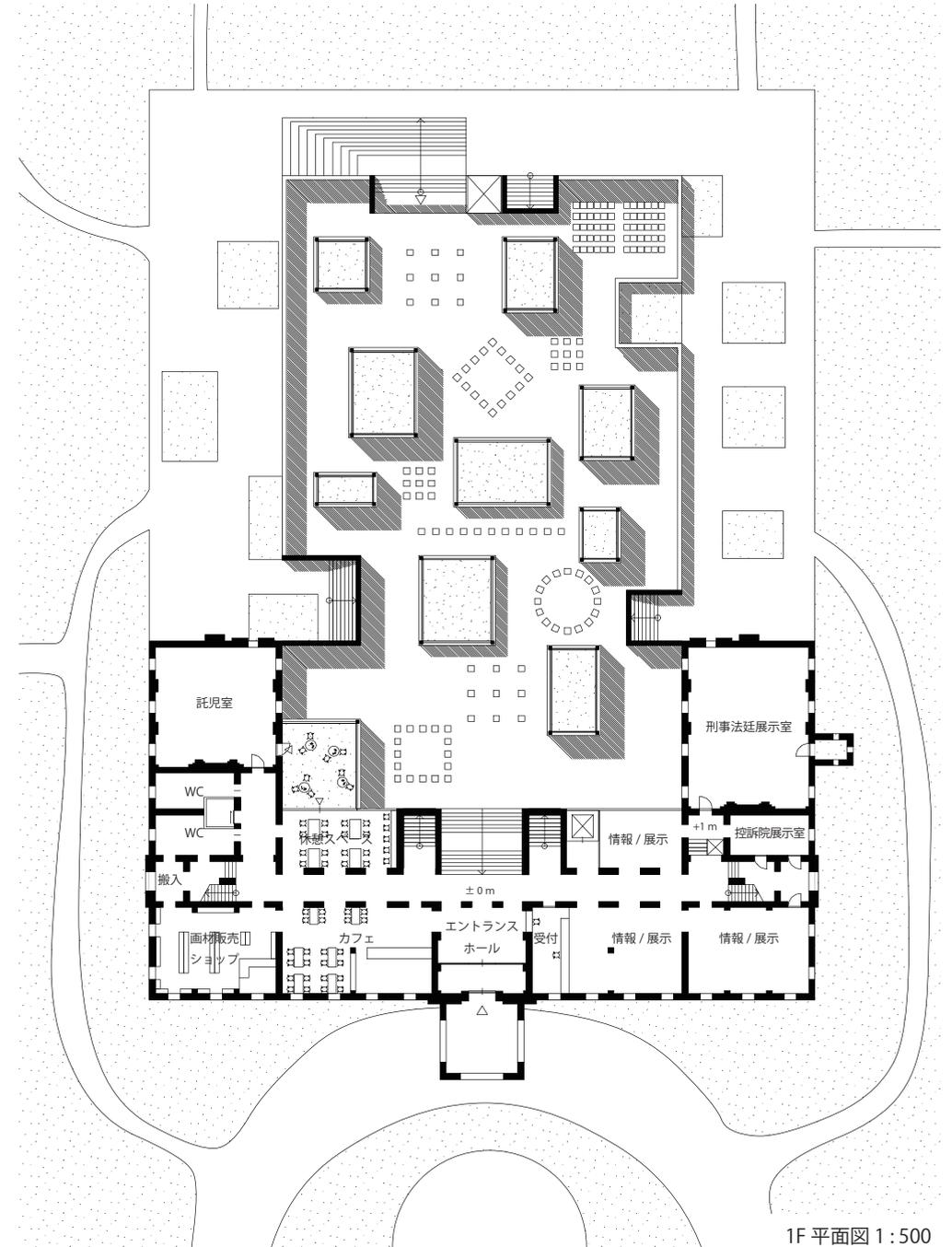
情報・展示スペース  
 カフェ・物販

人を集め、芸術を発信する場

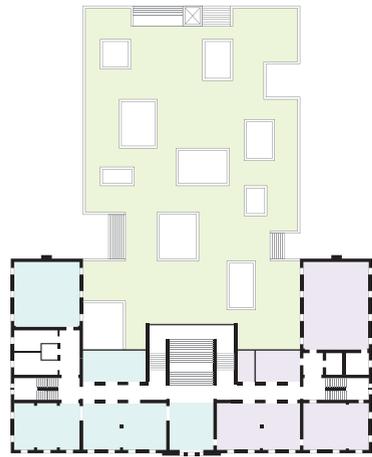
1Fには芸術祭などの情報発信・作品展示の場やカフェなどを設けました。北側は旧刑事法廷を含めた展示の場とし、南側はカフェや物販などを主としています。エントランスホールには情報発信のディスプレイを設け、また受付やカフェを隣接させることで、市民が気軽に訪れやすい場となることを目指します。また、エントランスからは屋上広場と工房が一度に視界に入り、訪問者を各々の空間に呼び込みます。全体に共通して、旧控訴院の建設当時の雰囲気損なうことの無いよう、札幌軟石を用いた既存の空間を可能な限り保存します。



エントランスホール



1F 平面図 1:500

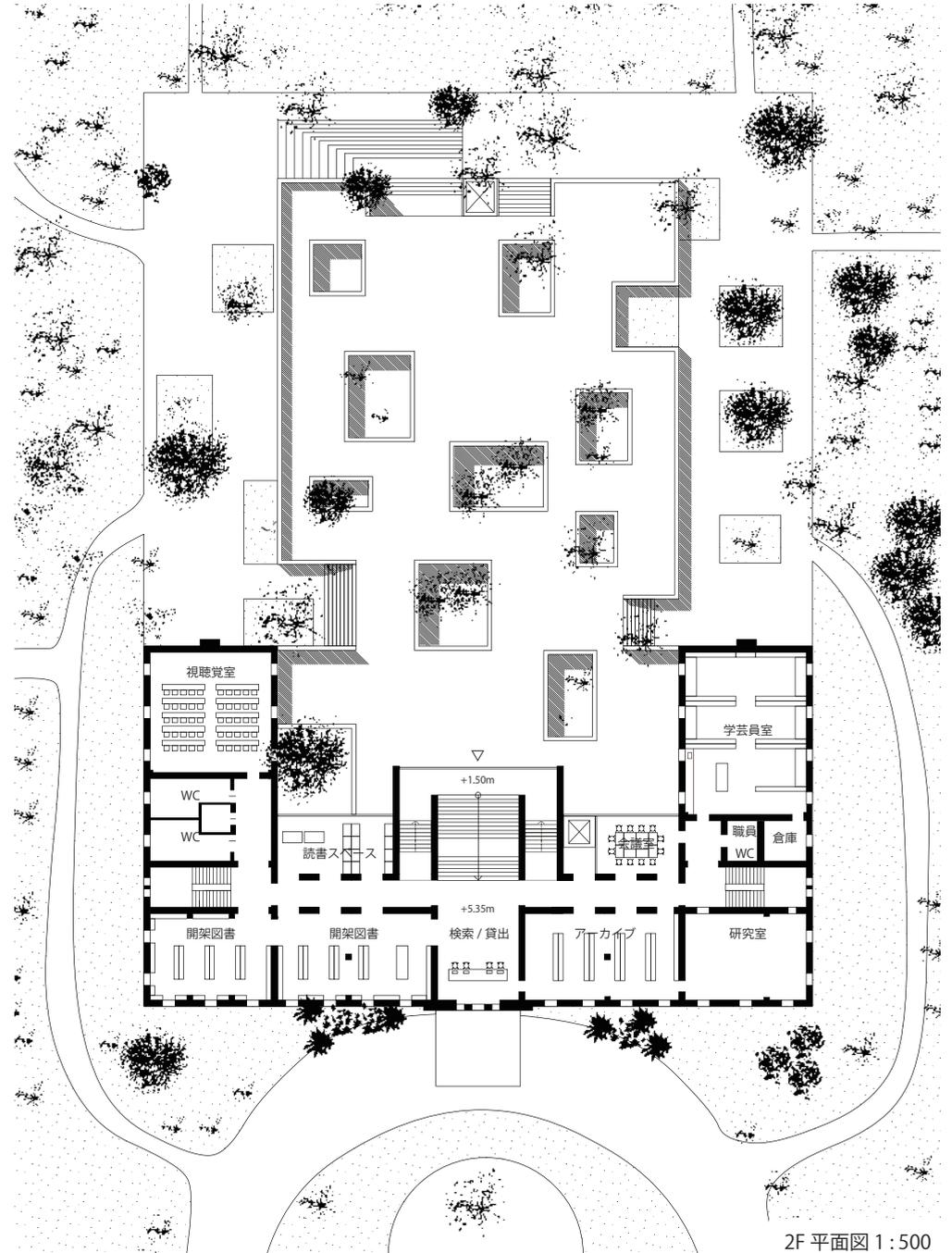


- 図書・視聴スペース
- 研究スペース
- 屋上広場

アーティスト・学芸員・市民が共に学ぶ場  
 2Fの北側には学芸員室とそれに付随する諸室を設け、南側には市民が自由に使える、美術に関する図書室と映像や音楽にも対応できる視聴覚室を設けました。書庫や視聴覚室はもちろん、ガラスに覆われた開放的な空間を西側に増設し、アーティスト・学芸員・市民が芸術について共に学び、研究できる場としています。西側の開口を大きくとることで屋上広場を見渡せ、広場の賑わいが伝わります。また既存の天井は撤去し屋根の構造を露出させることで、開放感の高い空間としています。



図書スペース



2F 平面図 1 : 500